

「ハンセン病から気付かされたこと」

青森市立新城中学校 二年 有馬 康平

夏休みのある日、僕はあまりの寝苦しさに目が覚め、水を飲みに行こうと台所へ向かった。すると居間に灯がついていた。どうしたのだろうと思いついてみると、母が映画を見ていた。

「こんな遅くに何観てんの。」

と訪ねると

「砂の器。日中は忙しくてみれないから。」
 と言って再び食い入るように観始めた。僕も眠れそうになかったので、一緒にになって見ていた。途中から見ただけの内容はよく分かった。僕は「らい病って確かハンセン病のことだよな。」とふと思

った。僕がハンセン病のことを初めて知ったのは、中学校一年生の時だ。僕の通っている中学校のそばには松丘保養園という国立療養所があり、元ハンセン病患者の方々が入所している。昨年には保養園の方が来校し、この病気について様々なお話をしてくださった。しかし、当時の僕は何の興味も関心もなく、ただ漠然と話を聞いていた記憶がある。

だが、こうして映画の題材にもなっている大きな問題だと知り、この病気についてもっと詳しく知りたいという探究心が出てきた。次の日、僕は図書館へ行き、ハンセン病に関する書物を読みあさった。そして、一冊の写真集の中の一枚の老人の写真に目が止まった。変形し曲がっている指。溶けてしまったかのように崩れた鼻。そして、全て抜け落ちてしまった髪の毛や眉毛。「これは本当に人間ののだろうか。」僕はこの写真を見た時、味が悪いと思っただけではもちろんだが、疲れきった老人の顔から人間の感情がまるで感じられないことに驚いた。人間がここまでなるとはどれほどの事があったのか。それは、本や資料を読み進めていくうちに少しずつ分かってきた。

一九五三年に施行された「らい予防法」により、全ハンセン病患者は全国各地にある療養所に強制収容され、二度と出所することとは許されなかった。老若男女問わず、この「ハンセン病」に感染してしまっただけで、愛する家族や友人たちから引き離されてしまう。そこは療養所とは名ばかりのまさに監獄同様だったという。僕は昨年、世界的に大流行した新型インフルエンザに感染し、一週間ほど一時的な隔離状態にあった。食事は家族と違う部屋で食べ、部屋から出る時はマスクを着用するなど、他の人への感染を防ぐためいくつもの制限がされ、不自由さを感じていた。しかし、こんなものとは比べものにならない程、ハンセン病の隔離はひどかったらしい。特效薬のなかった時代では、不治の病とされ、多くの人が後遺症により醜い姿となってしまう。そのため、病

気が治ったとしてもその外見から、差別・偏見され、社会に復帰することはおろか、自分の家に帰ることすらできず、施設の中で一生を終えなければならなかった。写真の中の老人は肉体的、精神的に追いつめられ、そして全てを悟ったのだろう。僕はなんと、もやるせない思いになつたと同時に、一日、二日、文献を読んだ、改めてハンセン病問題は根深く、とてつもなく大きな問題である

今、全国の元ハンセン病患者の平均年齢は、七十歳以上という高齢化が進んでいる。そのため残りの人生を療養所でひっそりと送っている人も多いという。この方々が受けてきた苦しみを決して忘れてはいけない。そして、同じ過ちを二度と繰り返さぬよう、次の世代へ伝えていくことが僕達にできるせめてものことだろう。

人間は皆平等である。ましてや病人を差別・偏見するなどは、決してあってはならない。だが実際はこの世から、差別・偏見が完全に無くなることは残念ながらないだろう。

ならば助け合ひの心が多くの人に芽生えてくるような世の中になればよいのではないかと僕は思う。自分ばかり世話になるのでなく、社会や他の人々のために役立つことを見つけ、行動したいと思う。

人間が人間らしく生きる。

簡単なようで難しい事だ。
ハンセン病が僕にそう気付かせてくれた。